

論文の内容の要旨

論文題目 「反」帝国主義の文化と歴史
——戦間期の帝国日本と植民地朝鮮の言説空間——

氏名 ちょう くわん じゅ
趙 寛 子

本論文では、第一次世界大戦から第二次世界大戦にいたる期間に、帝国日本と植民地朝鮮の言説空間を横断する文化と歴史認識のありようを考察した。とりわけ民族運動・社会運動に携わっていた植民地知識人の歴史・文芸評論を中心に、同時代の植民地と帝国を交差/断絶する文化のありようを見出した。本稿は、第3部・第6章の体制で構成されたが、各章では、反帝国主義の思想、および帝国と植民地のナショナリズムが絡みあって連鎖する「思想」「知」の具体像を検討した。そのうえで、帝国主義とナショナリズムが敵対的に共存する現実、この近代の歴史的遺制を断ち切るための思想運動・歴史認識の不/可能性を再考してみた。

第一部では、1910-20年代の民族主義思想の代名詞でありながら、1930年代につながる「非妥協/妥協(協力)」の問題を象徴的に代表してきた申采浩と李光洙の思想と個人史を、「民族史」からずらして、暴力批判の観点から省みた。第1章では、第一次世界大戦以降の申采浩の暴力批判論を究明し、それが同時代の魯迅の思想、インド・アイランドの状況に見られる暴力批判の声と共鳴することを確認した。第2章では、李光洙が朝鮮民族の文明化・主体化を実践する過程として「親日ナショナリズム」を形成したことや、それが破綻するしかなかった植民地帝国の生活空間を明らかにした。第一部では、申采浩と李光洙の思想的差異に注目しながらも、暴力をたんに植民地民族を抑圧する他者の罪と見なさず、帝国主義時代における人々の生存の問題として取り上げた。

第二部では、1930年代の「朝鮮学」「古典復興」「世界文学」「国民文学」の諸論を中心に、植民地/帝国に連なる文化と歴史のありようを解明した。1920年代の文化運動では、民族的独立や文明化をめぐる啓蒙的・宣言的な言説が多かった。植民地の奴隷になった恥辱を吹

き飛ばして文明の主体を追いかけるか、それとも、文明の実体である植民地支配の暴力に非妥協的に抗するか。民族的生をめぐって現実的に割り切れない方法的実践が議論されていた。その亀裂は1930年代にも持続されたが、植民地帝国の編成替えに伴い、植民地体制における朝鮮の政治的権利、経済的成長、文化的伝統、教育の向上をもとめて活動する人々が増えるなかで、世代的経験・思想的差異も複雑な様相を帯びるようになった。世界文化の多様な流れが翻訳される1930年代には、民族的生の活路に限定されずに、近代の世界文化/帝国の文化統合策に編入した歴史的現在を省察し、来るべき歴史・文化・社会のあり方を探る批判的方法論や多様な創作的な実践が行われた。そうした朝鮮の言説空間に現れた言葉は、植民地帝国日本の内部から同時代の世界の多様な言説を翻訳して思索する、複数の雑種 (hybrid) 的な朝鮮語である。本稿は、その文化のあり方を、歴史を方向づけていく複数の個別的な行為主体の思想＝実践として捉えるとともに、それがもつ社会的力を総括した。

本稿では、植民地/帝国の差別的な歴史的空間で、思想的・制度的に緊密にせめぎあい交錯しあう文化を同時代の文化 (contemporary culture) として捉えた。植民地/帝国の同時代性は、非同時的なものの同時代 (contemporaneity of the non-simultaneous) を構成し、通約不可能なものの同時代 (contemporaneity of the incommensurable) を意味する。この「非同時的な同時代性」の概念は、先進資本主義・帝国主義国家中心の単線的な歴史発展の叙述を批判して、前近代と近代の異なる時間性が共存する植民地的近代の状況を叙述したポストコロニアリズム/サバルタン研究の成果を受容している。1930年代から西洋帝国主義を駆逐すべき東洋の運命共同体として動員され、天皇制イデオロギーの政治・経済・文化的な統合政策を押し付けられた。朝鮮では、植民地と植民地本国の非同時的な差異とともに、植民地/帝国をつなげる同時代の絡み合いを問うことがより大事なポイントになってくる。したがって、本稿で「非同時的な同時代性」をいう際には、日本との断絶ばかりを捉えてきた民族主義的な文化史を反省し、帝国主義と反帝国主義の「知」が交錯/拮抗する植民地/帝国の時空間性を連鎖的に捉えた。

第三部では、日中戦争期の「東亜協同体」論を中心に植民地/帝国の自己防衛の思想連鎖を検討し、同時期に〈世界史〉の不/可能性を問う徐寅植の歴史哲学を考察した。第5章では、日本と朝鮮の転向左派を中心に展開された「東亜協同体」論が、個人的信念や自民族に対する屈折/背反の問題ではなく、日本・朝鮮・中国の間で他者の歴史に向けられた思想的連鎖/共犯的暴力の問題であることを問いつめた。第6章では、徐寅植の歴史・文化評論を中心に、帝国主義・民族主義・ファシズムの権力運動に包摂されない「世界性の世界」に対する問いが、個別主体の歴史認識＝行為のなかでどのように追求されたかを追いかけてみた。徐寅植のいう「可能的必然」「当為と可能の一致としての私の運命」を中心に、他者ととともに認識すべき歴史の可能性を省みた。

資本主義の不均衡な発展と帝国主義の競争的な膨張欲は、世界の人々を巻き込んで全体戦争・総力戦 (Total War) を繰り返していたが、植民地帝国日本で行われた暴力批判の言説

は、いかに現れていただろうか。脱植民地・脱帝国主義の意志が、帝国主義の支配力に同化されずに進むべき道はいかに開かれるだろうか。本稿では、近・現代の世界に根強く刻まれた、強者の進歩論理を払拭し、国境をこえて弱者と共生するための歴史づくりは、民族史・国民史に代わるべき歴史認識の大事な課題であると信じている。だからこそ本稿は、植民地/帝国の同時代の歴史と文化を省み、民族・国家の内/外/間で、民主的・共生的な関係に開かれる〈世界史〉の不/可能性を再考した。両大世界戦争の間、植民地/帝国の言説空間で表れた知と暴力の問題を直視し、〈世界史〉の不/可能性の問題を追いつめてみた。